



|                  |                                                                                 |
|------------------|---------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | マイノリティの歴史叙述：サルトカルマクの歴史書を翻訳して                                                    |
| Author(s)        | 秋山, 徹                                                                           |
| Citation         | 日本中央アジア学会報, 18, 63-64                                                           |
| Issue Date       | 2022-07-31                                                                      |
| DOI              | 10.14943/jacas.18.63                                                            |
| Doc URL          | <a href="http://hdl.handle.net/2115/91609">http://hdl.handle.net/2115/91609</a> |
| Type             | article                                                                         |
| File Information | JB18_014akiyama.pdf                                                             |



[Instructions for use](#)

## マイノリティの歴史叙述 —— サルトカルマクの歴史書を翻訳して ——

秋山 徹

中央アジア現代国家のあり方を考える際、各共和国のマジョリティを成す「名称民族」のみならず、マイノリティ集団への目配りが必要不可欠であることは言を俟たない。本公開パネルセッション「マイノリティ研究の新地平——ユーラシア近現代史の多声的再構成に向けて——」は、中央アジア（ウズベキスタン、クルグズスタン）とトルコのマイノリティを対象に、文献史学のみならず参与観察や GIS（地理情報システム）といった新たな手法を用いた近年の研究成果をよりひろく共有することを目的として組織された。

本報告が取り上げるサルトカルマクは、ジュンガル帝国を形成したオイラト系集団の末裔である。19世紀中期に新疆からロシア領（イシククリ湖東南岸）へ移住し、以来150年にわたってクルグズスタンのマイノリティ集団として暮らしてきた。報告者はこれまでクルグズスタンのマジョリティであるクルグズに焦点を当てて研究を行ってきたが、昨年、サルトカルマクによって執筆された歴史系譜書——シャリプ・エゲンベルディエフ著『祖母ムシュラのサンジラ』（チェルペク、2006年）——を翻訳する機会を得た<sup>(1)</sup>。

本書『祖母ムシュラのサンジラ』の著者シャリプ・エゲンベルディエフは、1917年にカラコル近郊のチェルペクに生まれた。1936年にカラコル教育大学を卒業後、半世紀にわたり教育畑に勤務した著者が歴史書を著すこととなった背景には、学生時代に師事したテュルク学者フサイン・カラサエフの影響があった。カラサエフの助言にしたがい、祖母ムシュラをはじめとする古老たちから聞き書きを行い、ノートにまとめていたという。ソ連時代にも出版を計画したが叶わず、日の目を見たのはソ連解体後の1997年、地元チェルペクのローカル新聞においてであった。同紙に掲載された連載をまとめて刊行に至ったのが本書である。

本書は、全体としてサルトカルマクの名祖たちの事績に沿いながら、その集団形成を皮切りに、ロシア領への移住とその後の暮らしを中心に記すものであり、そこからは彼らのアイデンティティの様態に関わるいくつかの特徴を指摘することができる。この点について、本

(1) シンジルト著『オイラトの民族誌——内陸アジア牧畜社会におけるエコロジーとエスニシティ——』明石書店、2021年、249-269頁。

報告は、2021年に *Central Asian Survey* 誌に発表された同様のテーマを扱う論文 [Baasanjav 2021] を参考にしつつ検討をおこなった。Baasanjav [2021] は、ソ連時代にサルトカルマクのクルグズ化が進展し、現状において、彼らが「ほぼクルグズ almost Kyrgyz」であると指摘するが、本書がクルグズの歴史叙述であるサンジラの形式を踏襲しつつ、クルグズ語で執筆されているということにも、彼らのそうした状況をうかがい知ることができよう。二つ目の特徴として、クルグズスタンやクルグズとの繋がりを強調している点が挙げられる。興味深いことに、本書がオイラト・モンゴルのアイデンティティに触れることはほぼなく、サルトカルマクの「故地」をクルグズスタン東南部に相当する地域とみなし、19世紀後半に生じた、新疆からイシククリ湖東岸への移住を「故地への帰還」として記す。こうした記述の背景に透けて見えるのは、マイノリティである彼らが現代クルグズスタンの領域に暮らすことの正当性を意識していると思われる点である。マイノリティとしての彼らの生存戦略という点に関して、Baasanjav [2021] によれば、ソ連解体後のサルトカルマクのアイデンティティとして、カルマクを敵視するクルグズ民族主義を背景に、従来の「ほぼクルグズ」から「クルグズよりもクルグズ」な存在としての自己イメージの強調が観察されるとする。果たして、本書においても、イスラームの篤信者にして勤勉、勤労、教育熱心なサルトカルマク像が提示されていることを見て取ることができる。マイノリティである彼らの生存戦略、アイデンティティの様態、マジョリティであるクルグズ社会との距離感といった諸点について、より包括的な研究の展開が期待される。

## 参考文献

Baasanjav Terbish. 2021. "The Sart Kalmaks in Kyrgyzstan: People in Transition," *Central Asian Survey* 40(3), pp. 313–329.

(早稲田大学高等研究所)